様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４６１

研究課題名（和文）新しい「倫理的共感」の可能性：社会的分断に向き合う現代アメリカ詩

研究課題名（英文）Ethical Empathy: Contemporary American Poetry's Response to Social Division

研究代表者
古村　敏明（Komura, Toshiaki）

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：９０６３２５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間全体を通じて実施した研究の成果としては、倫理的共感をテーマとした多民族比較詩学分野の国際共著が、本助成の中心的な成果物となる。助成期間中に研究調査が完了しており、現在執筆が進行していること、及び、2023年に出版社へのアプローチを開始した際の感触などから、1～3年内の刊行が想定される。他の成果としては、派生課題を含む関連課題の論文3件、学会発表9件（うち1件は予定）、学会セッション主催3件（うち1件は予定）、などがある。2020年のパンデミック発生によって申請時当初の計画からいくつか変更点が生じたが、本助成によって生産的な研究活動ができたことを、心より感謝申し上げたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、共感の必要性が再確認された原点である20世紀中盤から、21世紀の現在までのアメリカ詩の軌跡をたどり、「倫理的共感（ethical empathy）」という概念を提示する。本研究の目的は、文学的意義としては、従来の共感の概念の限界を分析し、現代アメリカ詩が体現する、より高い倫理性を持つ共感という概念を解明すること、そして、より普遍的な社会的意義としては ethical empathy がもたらしうる寛容で生きやすい社会の可能性について思索することである。「倫理的共感」を定義し認知することは、tribalism に戻る様相を見せ始めている社会が融和性を復元する可能性を探る手助けになる。

研究成果の概要（英文）：The main research output that will come out of this grant is the co-authored monograph project on multiethnic comparative poetics; this project is currently underway, with an anticipated publication within one to three years. In this project, we aim to untangle the interplay of phenomena such as ingroup-outgroup conflicts, compassion fatigue, and inclusion-exclusion dynamics through a multiethnic comparative study of modern and contemporary American poetry. Other research output includes academic articles on related topics (such as "Ted Hughes's 'The Jaguar' and Animal Ethics," "Poetics of Humility: Animal Ethics in Elizabeth Bishop and Robert Lowell" in Bishop-Lowell Studies, and "Translation and Ethical Empathy: Robert Lowell's Imitations"), as well as conference presentations (such as "Speech in the Face of Legal Persecution: A Case Study of Mitsuye Yamada and Cherrie Moraga," "Lyric Poetry and Working-Through" at NeMLA, "Suffering of Others and Empathic Community-Making" at MLA).

研究分野：American Poetry

キーワード：American Poetry　Ethical Empathy　Multiethnic Comparative　Animal Ethics　Translation Studies

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

「共感」が攻撃にさらされている。ディプロマポリシーなどにみられる教育目標から、臨床心理まで、共感は人格的にも社会的にも有用な能力とされてきたが、近年様相が変わりつつある。*Against Empathy: The Case for Rational Compassion* (2016) において、心理学者 Paul Bloom は、共感はこと意思決定において有害にすらなりうる指針であると主張する。同様に、行動経済学でも、共感は、サンクコストの切り捨てなど、合理性が求められる判断をする際の妨げになることが理論化されている。政治においても、ある集団への共感が別の集団への敵意となり―例えば、グローバリゼーションの波にさらされ失職したアメリカ中西部の白人労働階級への共感が、反移民感情へと転化される、など―共感の「武器化」により、少数派迫害が正当化される現象が起きている。心理学でも、outgroup（外集団）よりも ingroup（内集団）のほうへ共感が集まりやすい現象や、compassion fatigue（共感疲れ）と呼ばれる事象などから、共感の有限性が指摘されている。共感は万能薬ではないのだろうが、では本当に共感は有害なのか？真の他者理解に通ずる共感は可能なのか、そして可能だとしたらどのようなかたちのものなのであろうか？また、文学はどのような「倫理的共感」を作りだすことができるのか？これらの問いに対する答えの探求として、本研究は、二つの大戦を経て共感の必要性が再確認された 20 世紀中盤から、21 世紀の現在までの越境的要素を内包するアメリカ詩―第二次世界大戦の日系人収容所の詩、Robert Lowell の翻訳詩、Sylvia Plath の原爆についての詩、Carolyn Forché の証言者の詩、人間にとって究極的な他者である動物に対する倫理性を考える詩、2016 年大統領選挙後の現代詩、など―を解析する。

Adam Smith の *The Theory of Moral Sentiments* (1759) に代表されるように、共感の概念は、綱渡りをしている人を見る観客が、あたかも自身が同様の行動をしているかのように身体を動かしてしまうように、人間の中に自然に起こる、他者の感情や認識を感じ取る能力として、道徳や社会性の根幹として位置づけられてきた。Simone Weil の *The Need for Roots* (1943) も、“roots” ―動態的な人間が欲する安定と安心という「根源」―の保持に、共感に基づく倫理が必要であると説く。そして、こと倫理という側面においては、特に喪失、悲痛、苦難といった感情への共感が重要視される。だが、同時に、Susan Sontag の *Regarding the Pain of Others* (2003) や、Maggie Nelson の *The Art of Cruelty: A Reckoning* (2011) が示唆するように、他者の苦痛に対する感情は、必ずしも共感や同情とは限らず、時には無理解や愉悦となることもありうる。また、共感が起こったとしても、ある特定の集団へのそれ自体が他の共感の対象から排外された集団への加虐ともなりうる。共感を作動もしくは休止させる要因とは何か、また、社会の融和性につながる共感とはどのようなものか、という研究は現在も続いている。

アメリカ文学研究と共感研究（Empathy Studies）の接点は、旧来より、Susan Warner の *The Wide, Wide World* (1850) や Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852) を典型とする、19 世紀の感傷小説がその代表例とされてきた。Meghan Marie Hammond と Sue J. Kim が編集する *Rethinking Empathy through Literature* (2014) などでも、それらの研究

で扱われる作品群は、主に小説や随筆である。Confessional Poetry（告白詩）と共感の関連を考察する研究なども存在はするが、詩と共感、特に現代詩と共感についての研究は今も初期段階であると言える。本研究は、この学術的空白を埋め、より倫理性が高い共感のかたちを模索するものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、現代アメリカ詩が表現する倫理的共感の定義や作用を解析するのものである。その中でも特に（１）ほぼ関係性がない、もしくは、敵性とみなされることもある outgroup（外集団）と認識される人たち、そして人間と異なるという意味合いで他者化される動物など、自然なかたちで共感が起こりにくい対象への共感の可能性、（２）national disasters （共同体が被った災害など）を扱う詩における共感の起こり方、（３）compassion fatigue の克服の可能性とその方法、という三つの主題に注力する。これらのカテゴリーの現代詩作品を分析することによって、詩がどのように共感を作りだすか、特に、従来なら共感の対象にならないかもしれない人たちや出来事に対してどのような共感が可能かを考察するのが、本研究の主旨である。

本研究の学術的独自性は、倫理性を追求することにより共感が outgroup（外集団）にも作用する可能性を模索することにある。共感は自分と類似するものたちに向けられる傾向が強いというのが心理学分野における通説で、それが前述の Paul Bloom の共感批判の柱の一つである。しかし、外集団と内集団の境界が複雑になった現代において、共感によって真に共同体の安定や安心を形成するのであれば、共感は自分と類似するとは限らない対象にも向けられなくてはならない。旧来の共感の限界に際し「共感の再定義」という試みを、従来の共感研究ではあまり扱われないアメリカ現代詩を通して考察することが、本研究の特色である。

本研究の創造性は、前述の三つの主題を扱うにあたっていくつかの新概念の提案をすることに依拠する。「倫理的共感（ethical empathy）」の概念をアメリカ現代詩の知見をとおして再定義する過程で、以下の概念も提案する。①翻訳や多文化主義の包摂により人種や国境の垣根を越えて文学的「先祖」をたどることから越境的に作品が形成される、cross-boundary inheritance（越境的相続）の概念。②共感の根源としての視界共有、perspectival adoption（視界の借用）という概念。③そして、これらが単なる強者による少数派の併呑にはならないための inclusive contradiction（包摂的矛盾）という、他者受容をその差異を統合も否定もせず、他者の自己アイデンティティを欠損させることなく包摂するという概念、などである。現代詩は「まだここにないもの」を表現する前衛的なジャンルである。単なる憐憫や強者による弱者の併合、またはカラーブラインドネスなど理想はともかく現実としては差異を存在しないものとして調和を促進する概念などとは異なる、新しい「倫理的共感」の可能性を、近年台頭しつつある種族優越主義的な風潮への対抗として、現代アメリカ詩は創造し続ける。

３．研究の方法

本研究の最終目標は、現代アメリカ詩研究をとおして外集団に対する倫理的共感（ethical empathy）の定義と認知によって、分断に苦しむ社会の融和性を復元する可能性を探ることである。その達成手段として、研究成果を社会に還元する目的で学術書を上梓する。研究方法は、現代詩の一次文献やアーカイブ資料、受容理論を含む文学理論、哲学や心理学などの学際的文献などを精査を基盤とする、精読と理論ベースの詩分析が中心になる。

研究計画は、4~6 年後の学術書出版を目標とし、以下を主要な行程とする。①本研究の重要性の証明として、論文を査読学術誌に投稿する。②すでに学術論文として出版された部分を加筆修正する。③学会発表をし、フィードバックを著書草稿に反映させる。④必要なリサーチのためのアーカイブ調査や客員研究員出向を実行する。この著書をとおして、アメリカ現代詩が示唆する新しい共感のかたちを明らかにする。この試みにより、アメリカの「今」を理解するという主目的のほかにも、多文化共存という日本も含めどの社会も避けて通れない事象を航行する道しるべを提示できれば幸甚と思う。

４．研究成果

研究期間全体を通じて実施した研究の成果の概要としては、まず、倫理的共感をテーマとした多民族比較詩学分野の国際共著が、本助成の中心的な成果物となる。助成期間中に研究調査が完了しており、現在執筆が進行していること、及び、2023 年に出版社へのアプローチを開始した際の感触などから、本報告書作成時から 1〜3 年内の刊行が想定される。他の成果としては、派生課題を含む関連課題の論文 3 件、学会発表 9 件（うち 1 件は予定）、国際学会セッション主催 3 件（うち 1 件は予定）、などがある。2020 年のパンデミック発生によって申請時当初の計画から変更が生じたが、本助成によって生産的な研究活動ができたことを、心より感謝申し上げたい。以下が成果物のリストである。

<u>論文</u>

2023

“Ted Hughes’s ‘The Jaguar’ and Animal Ethics.” In *The Explicator*. Vol. 81:2 (April 2023): pp.122-126.

“Elegies in the Age of the Pandemic: A Provisional Report on the Twenty-First Century American Poetry.” In *The Proceedings of the English Literary Society of Japan*, Kanto Branch. Vol. 22 (March 2023): Web.

2022

“Poetics of Humility: Animal Ethics of Elizabeth Bishop and Robert Lowell.” In *Bishop-Lowell Studies*. Vol. 2:1 (July 2022): pp.1-25.

<u>学会発表</u>

2024

“Translating Traumas into Landscapes: Tortured Nature Imagery of Mexican American and Japanese American Poetry.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 121th Annual Conference, Palm Springs (November 7-10) (forthcoming)

2023

“Poetry of the Covid-19 Pandemic: Shifting Perspectives on the Poetics of Grief.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 120th Annual Conference, Portland (October 25-29)

“Speech in the Face of Legal Persecution: A Case Study of Mitsuye Yamada and Cherríe Moraga.” Northeast Modern Language Association, 54th Annual Convention, Niagara Falls (March 23-26)

“Lyric Poetry and Working-Through: Three Generations of Japanese American Internment Camp Poetry.” Northeast Modern Language Association, 54th Annual Convention, Niagara Falls (March 23-26)

“Suffering of Others and Empathic Community-Making: An Ethical Conundrum of Modern American Poetry.” Modern Language Association, 2023 Annual Convention, San Francisco (January 5-8)

2022

“Political Emotions in Critical Times: Twenty-First-Century American Poetry and the Poetics of Enactment.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 119th Annual Conference, UCLA (November 11-13)

“‘The End of Poetry’? Elegies in the Pandemic Era and the Future of Mourning.” The American Literature Society of Japan, Kansai Branch, Kyoto Institute of Technology (November 5)

“Elegies in the Age of the Pandemic: A Provisional Report on the Twenty-First Century American Poetry.” The English Literary Society of Japan, Kanto Branch, 22nd Fall Convention, Chuo University (October 30)

2021

“Memory and Empathy: The Reconstructive Reception of Japanese American Internment Camp Poetry.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 118th Annual Conference, Las Vegas (November 11-14)

学会セッション主催

2024

“Animal Studies and Literature: Translation in Action.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 120th Annual Conference, Palm Springs (November 7-10) (forthcoming)

2023

“Animal Studies and Literature: Shifting Perspectives.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 120th Annual Conference, Portland (October 25-29)

2022

“Animal Studies and Literature: Animals as the Fantastic and Quotidian.” Pacific Ancient and Modern Language Association, 119th Annual Conference, UCLA (November 11-13)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toshiaki Komura	４．巻 2
２．論文標題 Poetics of Humility: Animal Ethics in Elizabeth Bishop and Robert Lowell	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Bishop-Lowell Studies	６．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5325/bishoplowellstud.2.0001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古村敏明	４．巻 22
２．論文標題 パンデミック時代のエレジー―21世紀のアメリカ詩に関する暫定報告	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本英文学会関東支部 第22回大会 Proceedings	６．最初と最後の頁 Web
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Toshiaki Komura	４．巻 81
２．論文標題 Ted Hughes’s “The Jaguar” and Animal Ethics	５．発行年 2023年
３．雑誌名 The Explicator	６．最初と最後の頁 122-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00144940.2023.2200155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　1件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Memory and Empathy: The Reconstructive Reception of Japanese American Internment Camp Poetry
３．学会等名 Northeast Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Fearless Speech in the Face of Legal Persecution: A Case Study of Mitsuye Yamada and Cherrie Moraga
３．学会等名 Northeast Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Suffering of Others and Empathic Community-Making: An Ethical Conundrum of Modern American Poetry
３．学会等名 Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Political Emotions in Critical Times: Twenty-First Century American Poetry and the Poetics of Enactment
３．学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 古村敏明
２．発表標題 詩の終焉？：パンデミック時代のエレジーと追悼のかたち
３．学会等名 日本アメリカ文学会関西支部11月例会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 古村敏明
２．発表標題 パンデミック時代のエレジー：21世紀のアメリカ詩に関する暫定報告
３．学会等名 日本英文学会関東支部第22回大会（2022年度秋季）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Memory and Empathy: The Reconstructive Reception of Japanese American Internment Camp Poetry
３．学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Post-9/11 Elegiac Poetry: From Poetic First-Responders to the Ethicists of Prolonged Mourning
３．学会等名 Northeast Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Toshiaki Komura
２．発表標題 Poetry of the Covid-19 Pandemic: Shifting Perspectives on the Poetics of Grief
３．学会等名 Pacific Ancient and Modern Language Association（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関